

原 著

光源氏の愛した女性 — 花散里という人 —

戸田 由美

＜要 旨＞

「花散里」の巻に三の君として登場した彼女はその後、花散里と呼ばれて源氏とのつながりを次第に深めながら生きていくのであるが、彼女の人生を通じての転換点は、夕霧、玉鬘の養育を托されたことである。これは、源氏物語上、非常に意義深く関心の及ぶ点である。問題は、この様な大役になぜ花散里が選ばれたのかである。また、花散里の〈花〉はもちろん〈橘〉ではあろうが、「花散ル」というイメージにもし「散華」のイメージを重ねることが許されるならば、作者はひそかに彼女の中に「愛」の具現者としての「菩薩」像を描いたのではないかと大胆な想像も加えたいのである。源氏物語に登場する多くの女性が「恋」に終始している中であって〈花散里〉はやはり異彩を放つ存在である。なぜ、あれほどまでに源氏に愛され続けたのか、花散里という人の魅力を窮めてみたいと思う。

キーワード：光源氏、花散里、夕霧、玉鬘、養育、散華

1. はじめに

— 「花散里」巻登場の意味 —

源氏二十五歳、夏のことであった。源氏をとりまく環境は漸次冷えまさり、前年の冬の桐壺院の崩御、藤壺の宮の剃髪（先帝のために）。また源氏一派の官位昇進の見込みのないまま政権は右大臣へ移り、まさに源氏は「もの心細き」胸中の人であった。その様なとき、源氏は麗景殿女御の御方に花散里を訪うのである。それが「花散里」巻の始まりである。

人知れぬ御心づからの物思はしきはいとなき
ことなめれど かくおほかたの世につけてさ
へ わづらはしうおほしみだるることのみま
されば、もの心細く世のなべていとわづら
おほしなるるに、さすがなること多かり

玉上琢弥 源氏物語評釈
第二巻633頁

この巻は登場人物も少なく、その上、物語の区切りとして小休止的意味合いをも含む巻であるとさえ思わ

れてくる。文中に表れる「もの心細く」というのは状況的に下降線をたどる源氏の心中である。ところが「さすがなること多かり」とは、今までのことが捨てきれないというのであるから、なおこれから生きていく過程に対して、我々に期待を覚えさせることばでもある。またこのことばは直接的には「桐壺」巻から「賢木」巻にわたる過去のことを示していると考えられるが同時に、これからの展開のプロローグともいえるのではなかろうか。

麗景殿ときこえしは、宮たちもおはせず、院
かくれさせたまはひてのち、いよいよあはれ
なる御有様をただこの大将殿の御心にもて隠
されて過ぐしたまふなるべし

第二巻634頁～635頁

「もの心細き」源氏の訪ねた女性は麗景殿の女御であった。彼女は昔、源氏の幼少期、故桐壺院の女御であった。亡き父につながる女性の一人であり、過ぎ去った日々のことどもを共に語ることでできる人として忘れてはならない大切な存在であった。今、彼女は妹、

花散里とともにひっそりと暮らしているが、果たして源氏にとって麗景殿女御は、単純な過去の人であったのだろうか。あらためてここで源氏の「たずねる」という行為を考えてみるならば、思い出に浸る一心のふるさとに帰るといふ過程を見出すことができるのではないかと思う。人が新しく発足するとき、また跳躍するときには一度かがまなければならないと言われる。そのためにふるさとがあり、一旦かえる、もどるといふことによって新しいものにむかうという、さらなる飛躍を意味するのではないかと思われる。すなわち、源氏が麗景殿女御をたずねたということは、そういう気持ちの表われとみられないだろうか。満たされぬ心を満たしてくれるものとしての源氏の心中を支えるふるさとであり、環境なのである。

女御の御けはひ、ねびにたれどあくまで用意あり、あてにらうたげなり、すぐれてはなやかな御おほえこそなかりしかど、むつまじうなつかしき方には、おほしたりしものを、など思ひ出できこえたまふにつけても、昔のことかきつらねおぼされて、うち泣きたまふ

第二巻640頁

これについて、藤村潔氏^{註1)}は「花散里試論」において次の様に述べている。

これ（源氏と麗景殿女御との対話）をそっくりそのまま源氏と花散里との関係にあてはまりはしないか。しかし短編花散里物語の主人公達にみられたところのその他大勢の総代的性格は、麗景殿女御と共に、短篇が長篇に転換したとき、物語の舞台から退場していったのである。

この部分は思い出に浸るといふ意味では、「花散里」巻の静止点である。つまり、故桐壺院在世当時と、麗景殿女御との懐旧のシルエットなのである。もしこの「花散里」巻が麗景殿女御の話のみで終わっていたならば展開を持たないであろう。麗景殿女御の話がイントロダクションとなって、続いて花散里が登場する。その展開によって、麗景殿女御それ自体に「里」という語がイメージされる。だから女御の存在自体が伏線的役割りを果たしているのであって、源氏にとっては古いものから新しいものへと移るその媒介が、女御であり思い出であり、ふるさとなのである。だから、ふるさとに回帰する気持ちが花散里を出現させることにつながるとは考えられないだろうか。すなわち花散里の登場は、麗景殿女御の再生であると解釈するならば、「花散里」というのは偶然の命名ではなく、そこに源

氏の思いが込められていると思われるのである。したがって、源氏が麗景殿女御を訪うたことは、新しい冒険に対するよりは古い世界に立ち帰ることを意味するのであるが、そこにとどまる限り新たな展開は期待できない。そこでその因子になるべき新しい女性の登場がどうしても必要となる。そこに三の君（花散里の別の呼び名）出現の必然性が求められるのである。藤村氏^{註2)}は

それにしても何故、女御と三の君という三人の主人公が必要だったのだろうか。これはどうも花散里物語の主題的平凡さとかかわりがあった様に思われる。

と述べておられるが、先に述べたように考えることは、そのまま氏の疑問に対する答えとなるのではないかと思うのである。

2. 源氏と花散里

一物語における花散里の登場箇所とその呼称をめぐって

「花散里」の呼称は、登場する巻の名からとられたものであり、さらには巻中の歌によるものであるが、巻々によってその呼称が異なっていることは周知の事実である。物語における人物呼称は、そのときそのときの存在意義と深く関わりのある問題ともいえよう。「花散里」という呼名の他に時代の推移と共に異なった呼名がつけられているが、彼女に名前を与えているのは、彼女を取り巻く人の心と時の流れである。

前章では＜花散里＞という人の登場意義にふれて少し述べたが、この章においては、物語全体において花散里がどのように位置しているか、具体的に考察してゆきたい。

まず初めに、花散里の登場する巻名と、その折、花散里がどのように表現されていたのかを列挙する。ただしその場合、必ずしも呼称とはみられない、住居をさしていると考えられるものもあるが、間接的に彼女の存在を指示しているのでここに含める。

一「花散里」巻

- ①御おとうとの三の君
- ②かの本意の所
- ③西面には

二「須磨」巻

- ④花散里の
- ⑤西面は

- ⑥花散里も
- 三「滯標」巻
- ⑦花散里を
- 四「蓬生」巻
- ⑧花散里を
- ⑨かの花散里も
- 五「松風」巻
- ⑩東の院造りたて花散里と聞えし
- 六「薄雲」巻
- ⑪東の院の対の御方も
- ⑫東の院にものする人の
- 七「朝顔」巻
- ⑬東の院にながむる人の
- 八「乙女」巻
- ⑭西の対にぞ
- ⑮かかる人をも
- ⑯東の院にも
- ⑰東面は
- ⑱花散里
- 九「玉鬘」巻
- ⑲うしとらの町の対
- ⑳ひむがしの御かた
- ㉑夏の御かた
- 十「初音」巻
- ㉒夏の御すまひ
- 十一「蛩」巻
- ㉓東の御かた
- ㉔こなたに
- 十二「野分」巻
- ㉕東の町などは
- ㉖東の御かた
- 十三「梅ヶ枝」巻
- ㉗夏の御方
- 十四「若菜」上巻
- ㉘こなたの上
- ㉙うしとらの町
- 十五「若菜」下巻
- ㉚夏の御方は
- 十六「夕霧」巻
- ㉛六条の院の東のおとど
- ㉜東の上
- ㉝東の御殿にぞ
- 十七「御法」巻
- ㉞花散里の御方に
- 十八「幻」巻

㉞夏の御方

十九「匂宮」巻

㉟花散里と聞えしは

全体を通しての概観は、①～⑧は大体＜花散里＞のみで終わる。ところが「松風」巻からは⑩＜東の院＞となり、「玉鬘」巻のあたりでは、㉑＜ひむがしの御方＞と呼ばれるが、それはやがて＜東の御かた＞であるとかく東の上＞という方向に落ち着くのである。

ここにあらためて源氏と花散里の、おもだった心的変化のみられる箇所を具体的描写を追ってみたい。

①御おとうとの三の君（「花散里」巻）

御おとうとの三の君うちわたりにてはかなう
ほのめきたまひし名残の、例の御心なれば、
さすがに忘れもはてたまわず、わざともて
なしたまはぬに、人の御心をのみつくしはて
たまふべかめるをも 第二巻635頁

花散里と源氏のなれそめのいきさつは語られていない。「はかなう」「ほのめき」「名残」、これらが二人の縁を表す語である。源氏は花散里に対して「わざともてなしたまはぬ」状態であるが、やはり

思ひ出でたまふには しのび難くて五月雨の
空、めづらしく晴れたる雲間に渡りたまふ

第二巻635頁

のである。

⑤西面（「須磨」）巻

西面はかうしも渡りたまわずや、とうち屈し
ておぼしけるに 第三巻45頁

須磨退去となる源氏は（二十五歳）、都落ちにあたり花散里と訣別することになる。作者は花散里をここでは「待つ女」として描いているように思われる。いったいアクティブであるのが幸せなのか、あるいは待つ身が幸せなのであろうか。

うちふるまひたまへるにほひ、にるものなく
ていとしのびやかに入りたまへば

その源氏を迎えて

すこしゐざりいでて、やがて月を見て

おはす

第三巻46頁

「待つ女」としての花散里が、その時覚えた安堵感と喜びを、無言のうちに「すこしゐざりいでて、やがて・・・」というパントマイムさながらの動きの中に見事に表現されているのではないだろうか。

月影のやどれる袖はせばくともとめても見ば
や あかぬ光を

に対して源氏は

月影のしばしくもらぬ空ながめそ

とお慰め申し上げる。ここで「いみじとおぼいたるが、心ぐるしければ、かつはなぐさめきこえたまふ」という地の文を通して、これを先の「つらしとや思わむとおぼせば・・・」と対比する時、花散里に対する源氏の気持ちの微妙な変化が描かれていると見ることはできないだろうか。

⑦花散里を（「濡標」）巻

かくこの御心とりたまふほどに、花散里をかれはたまひぬるこそいとほしけれ・・・おほやけわたくしものしづかなるに、おほしおこして渡りたまへり 第三卷300頁

今までの流れを振り返ってみると、物語は一見、悲劇的であり救いがたい暗さを有しているかの様に見えるが、ようやく春の到来である。源氏三十九歳、春、須磨からの帰還後花散里を訪う。源氏を安心させる花散里の様子が次の描写に窺える。

明け暮れにつけて、よろづに思しやうとぶらひきこえたまふを頼みにて、すぐいたまふところなれば今めかしう心にくきさまに、そばみうらみたまふべきならねば、心やすげなり 第三卷300頁

この「心やすげ」という意味は花散里の人となりを表す語である。この気持ちが実は二人のつながりを終始支えたのではないと思われる。源氏が須磨に都落ちする前、花散里の冒頭文に「さすがなること多かり」ということばがあった。捨て切れないというのである。いままでのことを・・・である。心のふるさとを求めて麗景殿女御を訪ねた源氏の、一服の小休止的鎮静剤はこういう言葉で示されていた。しかし今また「すてがたき世」が再登場するのはなぜか。

とりどりにすてがたき世かな、かかるこそ、なかなか身も苦しけれ、とおぼす

第三卷301頁

第1章で説明したことに加えて、おそらく冒頭時代の背景とも異なり、暗い須磨時代を経た暁に獲得した<心のふるさと>は、かつて麗景殿女御をたずねたことに重ねて今や、花散里へと移行し、ゆきてかえりし世界が形成されたのである。

⑩東の院（「松風」）巻

東の院造りたてて、花散里と聞えし、うつろはしたまふ、西の対、渡殿などかけて、まどころ家司など、あるべきさまに置かせたまふ 第四卷65頁

源氏三十一歳、東の院を落成する。花散里も新築落成されたに二条院の東の院に移る。薄幸なひとりの女

君としての存在が、この「松風」巻でもって、多幸な女性としての姿へと転換し、<花散里>という呼称から<東の院>と変遷してゆく呼称に麗景殿女御の妹というベールを脱いだ花散里をここにみる事ができる。姉君と比重の入れ替わりであることは、彼女にとって大切な人生の転換を意味するのではないだろうか。

⑬東の院にながむる人（「朝顔」）巻

源氏三十三歳、冬の夜話に明石上、花散里の人となりを紫の上に語る。

東の院にながむる人の心ばへこそ、ふり難くらうたけれ、さはたさらにえあらぬものを、さる方につけての心ばせ人にとりつつ見そめしより、・・・ 第四卷301頁

と心ばへを強調する文章が徐々に増す。玉上氏は源氏物語評釈^{註3)}で

花散里のことを「東の院にながむる人」と言っている。「ながむる」とは、はるかな古代の物忌の習慣に由来し、男女あいへだてられてあいあえぬあいだのもの思いの意味である。

と述べている。思い捨てることのできない女性であり、穏やかでつつましい女性こそが花散里であり、一時では形成できない花散里の心ばへの気高さが強調される。それは「さはたさらにえあらぬものを」に表れている。

⑭西の対にぞ（「乙女」）巻

源氏三十四歳から三十五歳までのことである。花散里は源氏と葵の上の間の（長男）夕霧を養育することになる。

殿は西の対にぞ、きこえあづけたてまつりたまひける

花散里はこれに対して

ただ宣たまふままの御心にて、なつかしうあはれに思ひあつかひたてまつりたまふ

と返答する。源氏が大切な我が子、夕霧を預けたのは、つつましくうち屈しながらも源氏に燃える自己を自ら抑えきった女の強さに源氏の信頼感が生まれたのではないだろうか。勿論、紫の上や明石上に托するには自身のかつての行動（藤壺との関係）が強くブレーキになったことはいなめないにしても。

⑮かかる人をも

ここで、夕霧と花散里との出会いがある。かかる人をも人は思ひすてたまはざりけりなど、わが、あながちにつらき人の御かたちを、心にかけて恋しと思ふもあじきなしや、心ばへのかうやうにやはらかならむ人をこそあひ

思はめ、と、思ふ 第四卷429頁
 全く源氏は影をひそめている。夕霧と花散里のみが浮き彫りにされている。夕霧には花散里が決して美しい人には思えなかった。しかし、父、源氏の彼女に対する思い入れの深さに感銘し、自身もまた花散里に接し、人間の価値の尊さを実感する。そしてそれは源氏の望むところでもあった。

秋山虔氏^{註4)}は

彼が源氏と花散里との関係を付度しつつ夫婦のつながりというものにあやにくさ、人間の価値の一筋縄にはいかぬはかりがたさへの思いを喚び立てられたとするなら、その点からしても源氏が花散里を夕霧の後見に選んだということはその処置自体が夕霧に対するすぐれた教育的効果をもたらしたということにもなるだろう

と述べているが、花散里の容姿と心ばへという相対立するものを、評価、強調するところに筆者紫式部の独特な心遣いを感じることができはしないだろうか。

⑲夏の御すまひ（「初音」巻）

夏の御すまひを見たまえへば、時ならぬけにや、いと静かに見えて、わざと好ましきこともなく、あてやかに住みなしたまへるけはひ見えわたる、年月にそへて御心のへだてもなく、あはれなる御なからひなり 今はあながちにちかやかなる御ありさまももてなしきこえたまわざりけり、いとむつまじくありがたからむいいもせの契りばかり、きこえかはしたまふ

一字一句たりとも省きたい部分である。安心立命の境地に達観している感さえある。この時代にはめずらしい一つの夫婦像であるかも知れない。夫唱婦随ということばがどこまでこの二人に重なるかはわからないが、ただただ信頼感によって結ばれているふたりは実に幸せである。

⑳夏の御方は（「若菜」下巻）

源氏四十一歳3月から四十七歳2月までのことであり、夕霧は二十歳から二十六歳までのこと、花散里は夕霧の姫君を預かることになる。

夏の御方は、かくとりどりなる御孫あつかひをうらやみて、大将の君の典待腹の君をせちに迎へてぞかしづきたまふ

第七卷323頁

夕霧と玉鬘、引き続いて夕霧の姫君の養育を仰せつかった花散里が「うらやみて」「せちに迎へて」「かし

づきたまふ」と、はじめて自己主張する極めつけのシーンである。源氏と子ども子どもとの戯れの中になぐさめを見出している。源氏も次のように語っている。

今はただこれをうつくしみあつかひたまひてぞ、つれづれもなぐさめたまひける

第七卷323頁

㉑東の上（「夕霧」巻）

源氏五十歳、8月から冬までのことである。夕霧二十九歳のこと。彼は花散里を訪ね、落葉の宮に対する恋の悩みをひっそりと打ちあける。父、源氏の前では固く口を閉ざしている夕霧がなぜか花散里にはすべてを委ねる一人の息子として、まるで母親との語らい風景である。

東の上、一条の宮渡したてまつりたまへる事と、かの大將わたりなどにきこゆる、いかなる御事にかは、と、いとおほどかに宣たまふ

第八卷447頁

夕霧は花散里から源氏に伝えてほしいと懇願する。

事のついでではべれば、かうやうにまねびきこえさせたまへ

第八卷448頁

そして花散里の源氏に対する鋭い視線が、次のように厳しくきらめく。この厳しさは内に秘められたものである。

さてをかしき事は、院のみづからの御癖をば人知らぬやうに、いささかあだあだしき御心づかひをば大事とおぼいて、いましめ申したまふ、後言にもきこえたまふめるこそ、さかしたつ人の、おのがうへ知らぬやうにおぼえはべれ、

第八卷450頁

と、源氏には自己というものがわかっていないのだと痛烈な批判をしている。初めての、母としての教訓である。夕霧はこの母に、自分の行動は自分で責任を持つと答えている。このあたりになってようやく花散里は「女」としてよりも「母」としての位置に身を移している。母は強しである。

㉒夏の御方より（「幻」巻）

夏の御方より、御ころもがへのご装束たてまつりたまふとて

夏衣たちかへてける今日ばかり古きおもひもすずみやはせぬ

御かへり

はごろものうすきにかはる今日よりはうつつせみの世ぞいとど悲しき

第九卷151頁

<夏の御方>という呼称はこの巻が最後となる。「玉鬘」巻、「蛸」巻でも同じ呼称が見受けられたが、必

ずとっていいほど衣替えに関する内容であった。やはり花散里が夏の御方でいらっしゃるからであろうか。源氏は花散里を「夏」に位置づけている。「花散里」巻では（第2巻640頁）

二十日の月さし出づる程に、いとど木高きかげども木暗く見えわたりて、近き橘の薫りなつかしくにほひて・・・

またこの「乙女」巻では

木高き森のやうなる木ども木深く面白く山里めきて、卯の花の垣根ことさらにしわたして、昔おほゆる花たちばな・・・

とあるがどちらも酷似している。〈花散里〉名前の由来をあらわすところの

橘の香をなつかしみほととぎす花ちる里をたずねてぞとふ

というこの歌は古今集夏の部

五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

から引かれている。それぞれの歌の余韻に、花散里を象徴するものが籠められているようである。「古きおもひ」「うつせみの世」は、いずれも事の果てを予感させる。かつては麗景殿女御をまるで心のふるさととして訪うた若き源氏は、その想いを花散里に重ねて「今」がある。そして花散里は源氏に新しい衣を奉り、古きは新しさに抱かれつつ、時は過ぎゆくようである。

③⑥花散里と聞こえしは（「匂宮」巻）

花散里と聞こえしは東の院をぞ、ご処分所にてわたりたまひにける 第九巻203頁

ご処分とは、いわゆる遺産分配のことである。「夕霧」巻で夕霧が花散里に恋の悩みを打ち明けた渦中の落葉の宮は、花散里の住居跡に住まわれたことである。

* 以上、36箇所には花散里が様々な呼称をもって登場した。〈御おとうとの三の君〉はいつしか〈東の上〉となり、源氏がおかくれになってからは最終的に〈東の院〉を頂くことになる。最後まで彼女の本質は変わることなく、絶えず清楚な美しさと控えめなつつまじやかな人柄に源氏もなぐさめられていたようである。花散里と源氏の性格描写は次のとおりである。

花散里；らうたげ (3)、つつまじやか (2)、めやすい (2)、なつかしい (2)、おいらか (4)、のどか (3)、さわやか、やはらか気色ばまぬ、おほどか (2) こめきて、みやびか

源氏；なぐさめ (2) うしろやすく (3) 思ひしづめ、心やすげ あはれ (2) やすらふ

となる。() の数は頻度数を示した。

3. 紫の上と花散里

前章では源氏と花散里との関係をながめてきたが、紫の上は花散里をどの様に感じていたのであろうか。印象的な巻が二箇所ある。

まずそのひとつとして「松風」巻において

心ばへの憎からぬなどわれも人もみたまへあきらめて、いとこそさわやかなれ

第四巻226頁

紫の上は花散里に対して好印象を覚えていると同時に、源氏が夕霧および玉鬘の養育を依頼したことを、源氏と花散里との特別な信頼関係をも含めて紫の上は遠くから彼女を見守っていた様に思われる。

次に「御法」巻について

紫の上と花散里の贈答場面である。法会が終わり、帰宅途中の花散里に紫の上の方から語りかけるシーンである。ふたりだけの特別な場面を、ことに「御法」巻になぜ設定されたのか、筆者の意図はどこにあるのか。二人の間で交わされた歌にその鍵があるようである。

紫の上；絶えぬべきみのりながらぞ頼まるる世々にとむすぶ中のちぎりて

花散里；結びおくちぎりは絶えじおほかたのこりすくなきみのりなりとも

と静かに答えている。この返歌は自身の気持ちを包み隠すことない清らかな素直さでもって表現している。玉上琢弥氏^{註5)}は

花散里はいかなる時にも恒の心を失わない人である。この人は恐らく世のそしりなど考えもしなからう。

と述べている。紫の上もその様な彼女にこの世のものともつかないやすらぎを覚えたことは、どうやら間違いないようである。源氏の反対を押し通して出家の道を歩まんとする紫の上、また現世にとどまるという花散里。しかし、花散里の様にここまで達観していながらなぜ出家しなかったのか、という疑問が残るのである。

4. おわりに

花散里の人生を通じての大きな転換点は夕霧、玉鬘の養育を托されたことである。上述した様に、それは彼女に対する源氏の信頼の深さが第一の要因であるにしても、夕霧の子を引きとる時に案じた彼女の熱意は、「女」としてではなく、「母」としての自覚によるものと考えざるを得ない。一見「弱気者」そのもののような彼女が「強き者」に転換した接点を私はそこに見る。「恋」から「愛」への展開をそこに見るのは極端にすぎるであろうか。「夕霧」巻にみられる源氏に対する鋭い批判も、その故にこそ可能であったとはいえないだろうか。「御法」巻における紫の上との真摯な対話も源氏との静かな諦観に満ちた歌の贈答にみられる「待つ」存在から「送る」存在への転換も「愛」の上に立ってはじめて可能となったのであると思う。「花散里」の巻の位置づけについても、上述したように源氏にとって「心のふるさと」ともいべき回想の巻としておかれているというのが通説であるが、その意味からしてもそこには「恋」よりもむしろ「愛」の存在が前提となるのではないかとと思われる。そこに登場する「三の君」が「恋」の担い手ではなく「愛」の具現者となるべく運命づけられていたとしても、恐らくは作者のイメージの中に、当初から計画されていたのではないかとと思われるのである。（「花散里」の呼称とともに）

また「花散里」の「花」はもちろん「橘」であろうが、「花散里」というイメージにも「散華」のイメージを重ねることが許されるなら、作者はひそかに彼女の中に「愛」の具現者としての「菩薩」像を描いたのではないかと大胆な想像も加えたいのである。源氏物語に登場する多くの女性が「恋」に終始している中であって、「花散里」はやはり異彩を放つ存在である。物語の作者は何らかの意味において、自身の投影を描くものであるが、更に一步をすすめるならば、「花散里」の中に作者の像をうかがうことは余りにも奇矯にすぎるとのそしりを受けるものであろうか。必ずしも結婚生活において幸福であったとは思われない作者が、娘賢子に傾けた愛情の深さを思う時、このような想像も敢えて試みたくなるのである。そして「花散里」を描きつくすことは、そのまま紫式部自身の救いともなったのではないかと思う。

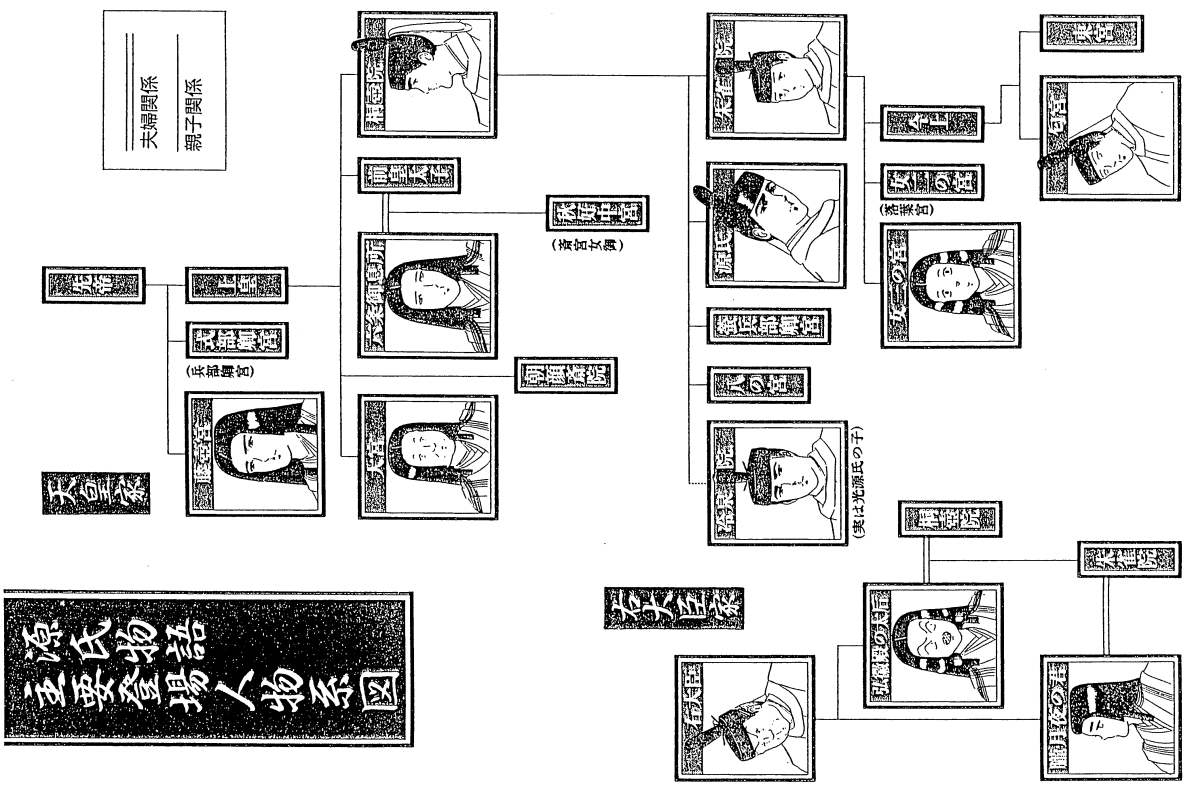
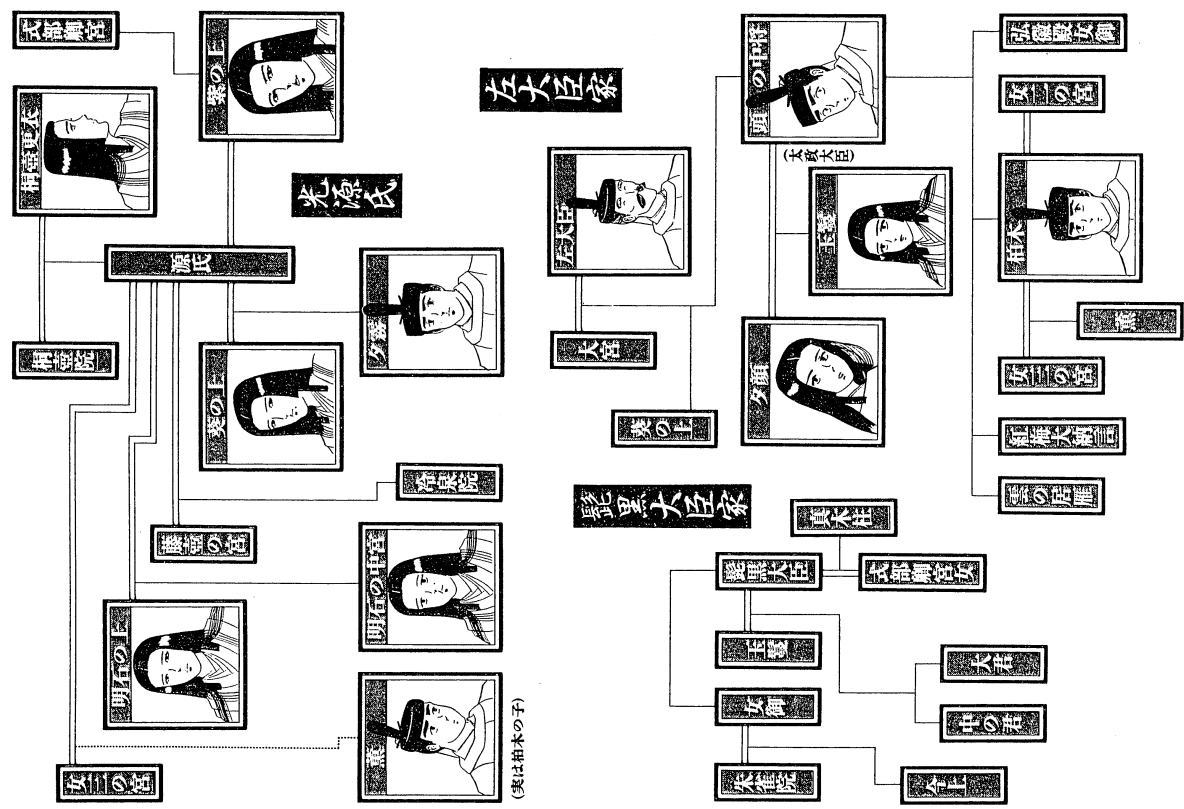
註

- 1 藤村潔「花散里試論」国語と国文学 昭35・2
- 2 同上
- 3 玉上琢弥『源氏物語評釈』第4巻302頁 角川書店
- 4 秋山虔「源氏物語の女性たち」(13)花散里 東京大学出版会U・P 87号 昭55・1
- 5 玉上琢弥『源氏物語評釈』第9巻53頁 角川書店

参考文献

*本稿において、花、ことに「橘」は「散華」のイメージに重なる主要な点であるゆえ、参考文献として次の歌及び仏典を掲げたい。

- 1 正治百首 九二九番
たが袖を花橘にゆづりけむ
やどはいく世とおとづれもせで
 - 2 古今集 夏 一三九番
五月まつ花橘の香をかげば
昔の人の袖の香ぞする
- 作品世界にあらわされているものとして
- 3 観世音菩薩. 法花経観世音菩薩普門品第二五
・阿弥陀経
・観無量寿経
- その他
- ・秋山虔『源氏物語』岩波新書
 - ・池田弥三郎『光源氏の一生』講談社現代新書円地文子『源氏物語私見』新潮社
 - ・実方清著作集『源氏物語の世界』桜風社
 - ・清水好子『マンガ源氏物語』上下 平凡社
 - ・山口仲美『平安文学の文体の研究』明治書院



清水妙子『源氏物語』より抜粋

The woman whom Hikaru Genji Loved
– Person – called 花散里

Yumi Toda

<Abstract>

She who appeared to the volume of "Hanatirusato" as three you lives afterwards while is called Hanatirusato, and can gradually deepen by a connection with Genji,; but in the turning point through her life evening fog, It is what was entrusted with the nurture of Buddhist angel's hair decorations. This is the point where I am very significant, and the interest extends to in The Tale of Genji. There is the problem why Hanatirusato was chosen as such an important role. In addition, I want to add the bold imagination if that I repeat an image of "散華" is permitted an image called "Hanatoru" not to mention <flower> of Hanatirusato even if it is <Tachibana> when the author may have pictured a "Bodhisattva" image as the person of incarnation of "the love" in her secretly. <Hanatirusato> is existence after all to stand out in the inside where many women appearing in The Tale of Genji do "love" all the time.

I want to be full of the charm of the person called Hanatirusato Why it continued being loved by that by Genji.

Key words: Hikaru Genji, hanatirusato, evening fog, Buddhist angel's hair decorations, Nurture, 散華